

小学校 第5学年 社会科学習指導案

北海道別海町立別海中央小学校
教諭 水口 拓真

単元名 森林とともに生きる（6時間）

**単元の
ねらい**

- 森林は、その育成や保護に従事する人々の様々な工夫と努力によって守られ、国土の保全など重要な役割を果たしていることを理解するとともに、地図帳や統計などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
- 森林資源が果たす役割を多角的に考える力、森林保全に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを説明したり、それらをもとに議論したりする力を養う。
- 国土の森林資源と国民生活との関連について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、我が国の国土に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚を養う。

**本時の
ねらい**

林業の活性化をめざす取り組みに着目して、森林を守り続けるために大切なことを捉える。
(第4時)

指導時期


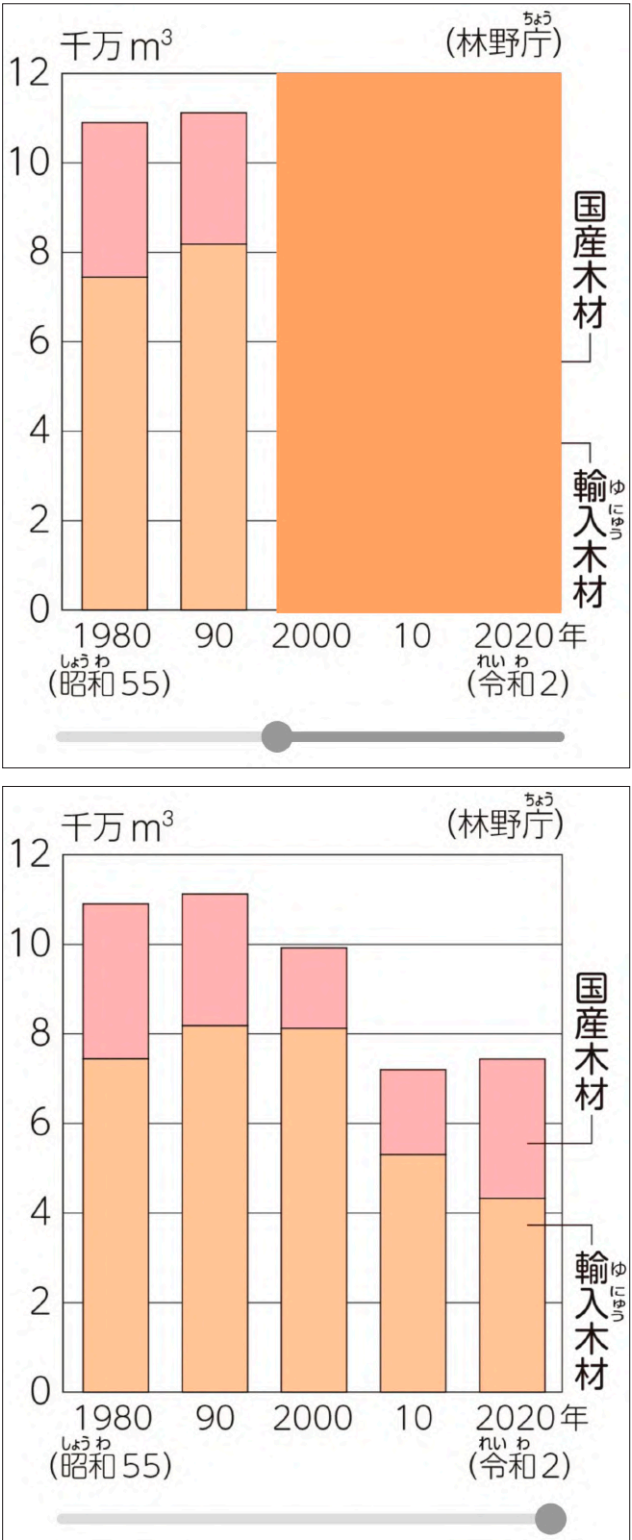
2月上旬～下旬


指導者用デジタル教科書(教材)活用の意図・目的

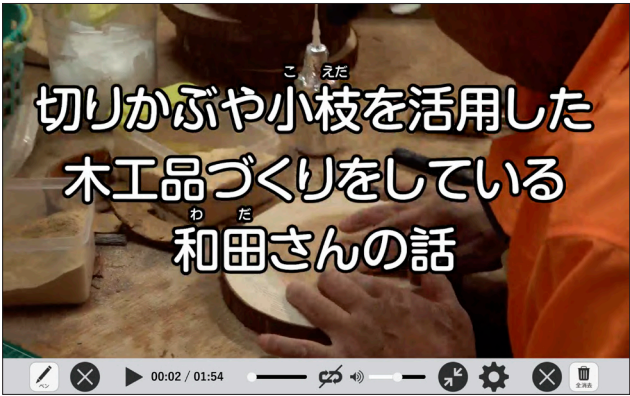
導入場面では、主にグラフ資料から読み取った情報を共有し、本時の「問い」が生まれるように展開する。これまで、資料をスキャナーで読み込み、A3判に拡大印刷して2枚を貼り合わせて提示する手間のかかる作業が、ほぼ毎時間必要であった。「指導者用デジタル教科書(教材)」を活用することで、資料提示にかかる指導者の負担を大幅に軽減することができる。

秀逸な機能の一例として、p.230「資料ア」に搭載されている「操作」コンテンツを挙げたい。グラフ資料から情報を読み取る際の重要な視点は、「変化」を捉えることである。具体的には、増加と減少、増減の大きさ、全体と部分の比較などである。搭載されている「操作」コンテンツには、グラフの一部や全体を隠すことができる機能があり、スクロールバーを操作することで、見せたい箇所を少しずつ見せることも可能である。この機能を活用して任意の範囲を隠すことで、児童に隠れている箇所の変化を予想させることができる。また、変化の程度や大きさを追加で問いかけながら展開することで、変化を意識させながら、グラフを詳細に確認することが可能となる。

本時の学習部分には、児童が活用できる動画コンテンツが搭載されており、「森林とともに生きる」の単元全体でも数多くの動画が収録され、授業で効果的に活用できる。以前は授業準備の段階で、主に「NHK for School」などで検索して、本時のねらいに即した動画資料を準備していたが、「指導者用デジタル教科書(教材)」には、内容に適した動画が標準搭載されている。これは、授業準備や教材研究を効率的に進めるうえで、特筆すべき機能の一つである。

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用																																															
導入	<ul style="list-style-type: none"> ●「指導者用デジタル教科書(教材)」の初期画面を開いてコンテンツを起動する。 																																																
	<ul style="list-style-type: none"> ●「資料ア 国内の木材使用量の変化」から「気づいたこと」「見つけたこと」を共有して、本時の課題につながる情報を集める。 <p>T：隠れている部分は、どう変化していくと思う？</p> <p>C：木は今もたくさん使われていると思うから、木材使用量に大きな変化はないと思う。</p> <p>C：1990年までの動きを見ると、国産の割合がさらに減って、輸入の割合が増えていくと思う。</p> <p>C：日本の山には木がたくさんあるから、少しずつ国産の割合が増えていくのではないかな。</p> <p>T：めくり紙を取って資料を確認して、「気づいたこと」「見つけたこと」「考えたこと」をたくさん挙げよう。</p> <p>C：全体的に減っている。</p> <p>C：輸入が減り、国産が増えている。</p> <p>C：特に、近年国産が増えている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●「操作」コンテンツのめくり紙機能で変化を予想する。  <p>Figure 1: Wood Volume (Million m³) - (林野庁)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>Year</th> <th>Domestic Wood (国産木材)</th> <th>Imported Wood (輸入木材)</th> <th>Total</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1980 (昭和55)</td> <td>~7.5</td> <td>~3.5</td> <td>~11.0</td> </tr> <tr> <td>90</td> <td>~8.0</td> <td>~3.0</td> <td>~11.0</td> </tr> <tr> <td>2000</td> <td>~11.5</td> <td>~0.5</td> <td>~12.0</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td>~11.5</td> <td>~0.5</td> <td>~12.0</td> </tr> <tr> <td>2020 (令和2)</td> <td>~11.5</td> <td>~0.5</td> <td>~12.0</td> </tr> </tbody> </table> <p>Figure 2: Wood Volume (Million m³) - (林野庁)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>Year</th> <th>Domestic Wood (国産木材)</th> <th>Imported Wood (輸入木材)</th> <th>Total</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1980 (昭和55)</td> <td>~7.5</td> <td>~3.5</td> <td>~11.0</td> </tr> <tr> <td>90</td> <td>~8.0</td> <td>~3.0</td> <td>~11.0</td> </tr> <tr> <td>2000</td> <td>~8.0</td> <td>~2.0</td> <td>~10.0</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td>~5.5</td> <td>~2.0</td> <td>~7.5</td> </tr> <tr> <td>2020 (令和2)</td> <td>~4.5</td> <td>~3.0</td> <td>~7.5</td> </tr> </tbody> </table>	Year	Domestic Wood (国産木材)	Imported Wood (輸入木材)	Total	1980 (昭和55)	~7.5	~3.5	~11.0	90	~8.0	~3.0	~11.0	2000	~11.5	~0.5	~12.0	10	~11.5	~0.5	~12.0	2020 (令和2)	~11.5	~0.5	~12.0	Year	Domestic Wood (国産木材)	Imported Wood (輸入木材)	Total	1980 (昭和55)	~7.5	~3.5	~11.0	90	~8.0	~3.0	~11.0	2000	~8.0	~2.0	~10.0	10	~5.5	~2.0	~7.5	2020 (令和2)	~4.5	~3.0
Year	Domestic Wood (国産木材)	Imported Wood (輸入木材)	Total																																														
1980 (昭和55)	~7.5	~3.5	~11.0																																														
90	~8.0	~3.0	~11.0																																														
2000	~11.5	~0.5	~12.0																																														
10	~11.5	~0.5	~12.0																																														
2020 (令和2)	~11.5	~0.5	~12.0																																														
Year	Domestic Wood (国産木材)	Imported Wood (輸入木材)	Total																																														
1980 (昭和55)	~7.5	~3.5	~11.0																																														
90	~8.0	~3.0	~11.0																																														
2000	~8.0	~2.0	~10.0																																														
10	~5.5	~2.0	~7.5																																														
2020 (令和2)	~4.5	~3.0	~7.5																																														

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
導入	<ul style="list-style-type: none"> ● 教師が提示した「共有したい情報」から、さらに本時の課題につながる情報を積みあげる。 <p>例：林業を営む人が減少していること。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本時の問いをつかむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● p.229 「資料コ 林業で働く人の数の変化」を拡大表示する。  <p style="text-align: center;">林業を営む人を増やすために、どのような取り組みが行われているのだろう。</p>
展開	<ul style="list-style-type: none"> ● 個人で考えをまとめる。 <p>どのような取り組みが進められているのかを調べ、学びを調整しながらプレゼンテーションソフトやワープロソフトにまとめる。必要に応じて「思考ツール」を活用して、取り組みの多様さを意識しながら構造的にまとめる。</p> <p>【活用する資料】 p.230 本文 「資料イ」「資料ウ」「資料エ」 p.231 本文 「資料オ」「資料カ」「資料キ」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「思考ツール」機能を活用する。 <p>ツールバーの「思考ツール」から「ウェビング」を選択し、本時用に加工する。 作成したものを印刷して配布したり、児童用端末に共有・投稿したりする。</p>  <ul style="list-style-type: none"> ● 資料を拡大表示する。 

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
展開	<ul style="list-style-type: none"> ● 動画「切りかぶや小枝を活用した木工品づくりをしている和田さんの話」を視聴し、深める。 ● 引き続き、「思考ツール」を活用して構造的にまとめる。 ● 学習支援ソフトウェア等を活用して、他の児童がまとめた「思考ツール」を相互に確認し合う。その後、教師用端末に提出する。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「動画」を視聴する。 
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ● 次時につながる「問い」を共有し、疑問や問題意識をもつ。 	<div style="border: 1px solid green; border-radius: 15px; padding: 10px; text-align: center;"> <p>豊かな森を残すために、わたしたちにもできることがあるだろうか。</p> </div>

指導者用デジタル教科書(教材)を活用したことで得られた効果

今日、令和の日本型学校教育が目ざされており、児童一人一人に、学びに向き合う力や自らの学びを調整しながら進めていく力が求められている。これこそが、「学習の個性化」である。また、指導者にも、従来の知識伝達型の授業スタイルから、児童の実態や学びの多様性を的確に捉えながら、個々の「学びを支える」スタイルへの変化が求められている。

それでは、児童が自らの学びを調整しながら進めていくために必要な「支え」とは、なんであろうか。そして、社会科における主たる教材・資料である「教科書」を活用しながら学びを進めていくうえで、どのような「支え」が必要となるだろうか。その「支え」の一つが、学びを進めていくうえで活用する資料、特に教科書における「視覚情報の整理と焦点化」であると考えられる。

社会科の教科書の見開きページには、多くの情報が盛り込まれている。本文をはじめ、写真、グラフ、地図、図表と多岐にわたる資料が、本時のねらいや問いに応じて配置されている。そのため、「情報量が多い」と感じ、「どこを」「どこから」読み取っていけばよいのか、迷う児童が一定数存在することとなる。特に、各種資料と本文内容との関連や対応を読み解くことに苦戦する児童は少なくない。

そこで、学びを進めるうえで重要になるのが、前述の「視覚情報の整理と焦点化」である。これまでは、「この写真資料について、本文〇〇行目で詳しく書かれているから」などといった教師の確認を伴うことがあった。しかし、デジタル教科書を活用することで、そういった情報の対応関係を効果的に焦点化し、整理することができる。例えば、デジタル教科書上で資料にカーソルを合わせると、本文の対応箇所がハイライトされる機能がある。これを教室に設置されたモニター上で共有することで、資料と本文の関連や対応といった視覚情報が整理されることとなる。

本時で活用するデジタル教科書の機能は、以下の三つである。

1. 写真資料の「拡大」「操作」コンテンツ
2. 「思考ツール」
3. 児童が学びを進めて深めるうえで視聴する「動画」コンテンツ

これらの機能はいずれも、視覚情報を整理するだけでなく、児童の思考を整理したり、学習の焦点化を促したりする効果が期待できるものである。